
悲しみの風の詩

エンブレム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悲しみの風の詩

【Nコード】

N9010P

【作者名】

エンブレム

【あらすじ】

中ヶ原に引っ越してきた徳川仲吉。彼は初寺高等学校に転校し、そこで沙良と伊理に出会う。そして、仲吉が座る机には花瓶に花が飾っていておいてあったのである。仲吉が花瓶のことを聞いても沙良たちは教えてくれない。不審に思う仲吉は学校の帰り道に長田と浜無に出会う。彼らの口から知った真実はなんと・・・！

第1話 中々原連続殺人事件（前書き）

当作品にはグロテスクや暴力シーンなどがございます。これらが苦手な方は小説を拝読しないようお願いします。

第1話 中ヶ原連続殺人事件

多くの人が殺されている・・・。

私の大切なひとが死んでいく・・・。

血塗れの数々の人影があり・・・。

そして、次々と人を殺す・・・。

6月8日。中ヶ原と呼ばれる地域。ここでは黒い髪で黒い目。そして赤いポロシャツと青いズボンを着た少年が家族と共に中ヶ原に引っ越すため移動していた。

「仲吉！ここが中ヶ原だ。いいところだろ？」

少年に言ってきたのは黒い髪で結構姿は若い感じの男で黒いスーツを着ている。

「そうだな。親父。」

「仲吉。もうすぐよ。」

さらにもう一人の女はブラウンの髪とブラウンの瞳をしていて姿は男のほうと同じく結構若くて美人。彼女も黒いスーツを着ている。「結構、田んぼに山に広いな・・・。」

彼の名は徳川仲吉。^{とくがわなかよし}父親の一定と母親の満子^{みっこ}と一緒に車を走っていた。

「でしょでしょ？」

それから数分が経ち、車は新しい家へと来た。そこで仲吉は家の引越し作業を手伝う。周りとは比べると結構豪華で広く白い家である。「目立つのが好きな親父らしいぜ・・・。」

「そりゃどうも。」

白い家だけではない。敷地も広く、普通の敷地ではこんな広さはあまり見たことがない。

「俺が結構金を持ってたことに感謝しろよ？仲吉。」

「感謝してるって。」

仲吉の父親は会社の社長である。結構、金は持っているほうだ。

「引越しのトラックも来ている。お前は車にある荷物を運んでくれ。」

「分かった。」

「はい。仲吉。これよろしくね。」

満子は車のトランクにある荷物を持って仲吉に渡した。

「分かった。」

仲吉は荷物を玄関へと運んだ。

6月9日。朝起きた仲吉は一定に呼ばれる。

「今日、お前の新しい学校に来るんだろ？新しい友達ができるとい

いな。男なり女なり作れ。」

「はいはい……。」

仲吉は味噌汁の汁を飲み干すと白いシャツと黒いズボンを着ると学校へと向かった。

「行って来る！」

「はーい！」

朝、歩いて学校へと向かっているとセミの鳴き声が聞こえていたり、車の音がしたりした。

「やあ！」

「！？誰だ！」

仲吉が振り返るとそこには一人の男の青年がいた。黄色の半袖シヤツを着ている。

「いきなり声をかけてすまないねー。君はこの辺じゃ見かけないけどどこから来たのかい？」

「え？最近中ヶ原に引っ越してきたばかりです。あなたは？」

青年は元氣満々に自己紹介を始めた。

「僕の名は長田多摩雄^{おさだたまお}。中ヶ原病院で医者をしているよ。君は？」

「徳川仲吉と言います。」

長田は仲吉の近くに來るとニコツと笑った。

「へえ……。徳川君と言うんだね。よろしく。じゃあ、僕はこれで。」

そう言い残すと長田は仲吉と別れた。

ここは初寺高等学校。仲吉はこの学校の職員室にいた。そして、一人の眼鏡をかけていて、水色の髪にスーツ姿の先生がいた。

「初めまして、君が徳川君かい？2年A組の担任をしている又中真^{またなかまなと}まなと」

名都。よろしく。」

「ああ。」

「さて、これから君が入ることになる2年A組の皆に君を紹介する。付いて来い。」

又中は仲吉を連れて学校の階段をあがり、2年A組へと向かった。2階の階段からベランダへと出て、2年A組の教室前へと待たされる。

「さて、君はここで待っていてくれ。」

そう言うとき又中は教室へと入っていった。ベランダから声が聞こえる。

「今から転校生を紹介する。」

又中がそう言った瞬間にクラスの生徒たちがザワザワしていた。

「え！？何！？男？女？」

「先生、どんな人ですか？」

そう言っている時、一人のうるさそうな女の声が聞こえてきた。

「先生！早く紹介してよ、早く！早く！早く！！」

「落ち着け、北崎。」

どうやら、さっきのうるさそうな女の声は北崎って名前の人らしい。

「今から入ってもらう。」

仲吉は又中に呼び出され、教室へと入っていった。そして、又中は黒板に徳川仲吉と書く。

「この学校に転校して来た徳川仲吉君だ。」

「よろしく。」

仲吉が挨拶した瞬間に教室中はざわつき始める。

「今日から座る席はここだ。」

誘導された席は右の前から2番目の空席である。さらにこの席は花瓶に花が添えられている。さらに机はいつもきれいになっていた。花瓶が置かれていることに疑問に思った仲吉は先生に声をかけた。

「先生、この机に花瓶が置かれているけど何でだよ？」

ざわついていた声が一瞬で静まる。どうやら何かあったようだ。仲吉はそう思いかけた瞬間に――

「ああ……。物整理などで偶然ここに置いちゃってたははは……」

そう言いながら又中はすばやく机に置いてある花瓶をどける。周りをみるとざわついた瞬間にしーんとしていてなんだか悲しそうな表情を皆はしていた。

「どうしたんだ……。こんなにいきなり静かになって……」

「な……。なんでもないぞ……。徳川君。ささっ。座りたまえ。」
先生はそうスルーしながら仲吉を椅子に座らせた。

授業が終わり、休み時間になると青い髪のショートヘアの少女と黄緑色の髪のツインテールの少女がいた。どちらも青色のこの学校のセーラー服を着ている。

「徳川仲吉君でいいかな？」

青い髪の少女は仲吉に声をかけてきた。

「誰だ？ お前……」

「自己紹介が遅れたね。私は星見沙良^{ほしみさら}。よろしくね。」

沙良が名前を名乗り終わると黄緑色のツインテールの少女も名前を名乗る。

「私は北崎伊理^{きたきいり}。よろしく。」

「北崎って……。さっき教室で大声あげていたやつかよ……」

「あはは……。伊理ちゃんはよく大声あげるのよ……」

「謎の転校生っていうのは何かいいかなって思ってワクワクしちゃって……」

謎の転校生扱いをいつの間にかされている仲吉は次々とクラス中にお互いの自己紹介をした。

「ところで……。俺の机に置いてあった花瓶のことだけど――」
すると突然皆は沈黙を始めた。何か嫌なことでも起きたのだろうか

か。仲吉はそう思った。

「何のことかな。私、すっかり忘れちゃった。ごめんね。」

そう言い残すと沙良や伊理。他の皆はすぐにその場をササッと去っていった。

放課後になると彼は沙良や伊理と共に帰っていた。

「明日は休みだから、この街を案内してあげる。」

沙良は中ヶ原を明日、案内しようと提案をした。

「いいね。明日になったら初寺高等学校前に集合ね。」

「分かった。」

そして、その後に3人は分かれて仲吉は一人で家に向かった。そんな時、誰かがまた声をかけてきた。

「君は徳川君だったね。」

「ああ。長田さん。」

さらに、長田の隣にはまた一人の男がいた。黒いスーツに眼鏡をしている。

「君が長田先生の言っていた徳川仲吉君だね。私は浜無康成。はまなしやすなり小説家さ。」

「よろしく頼む。」

「さて、君は何も知らないけどちょっと話しておくよ。いいかな？」

長田は何も知らないと言うように仲吉に何かを話そうとした。

「ここ中ヶ原では殺人事件がよく起こる街なんだよ。」

「え!？」

殺人事件という言葉にすごく驚く仲吉。そして、次に浜無が長田に続いて中ヶ原で起こる殺人事件の説明をさらに始めた。

「連続殺人事件っていったほうがいいかな。1ヶ月に何人かは殺されている。君がここに引越す前にも1人殺された。」

「6月に・・・!? 今日確か6月9日。」

「そう。6月7日に誰かが殺されたんだよ。確か徳川君と同じく高校2年生。そして、中ヶ原にある高校は初寺高等学校1校のみ。」

「それって・・・！？まさか・・・！」

仲吉は驚いていた。今日の学校で1つだけ花瓶が置いてあった机。どうかしたのかい？」

長田は仲吉に手を掴んで呼びかけた。

「2年A組の教室に俺が座る机に花瓶が置いてあったんです。この机に座っていた人が犠牲者・・・。」

「そして、今度は誰が殺されるんだろうな・・・。警察も必死に捜査をしているけどいまだに分からず・・・。」

浜無はゆっくりと歩きながらそう語った。

6月10日。仲吉は起床して初寺高等学校前に来ていた。

「遅いよー！！仲吉くんー！！」

伊理は大声で仲吉を呼んだ。相変わらずの大声だ。

「おはよう。仲吉くん。」

丁寧な仲吉に声をかけたのは沙良であった。

「おはよう。沙良。伊理。」

お互いに挨拶をした仲吉はさっそく街を案内させてもらうことにした。

「ここが中原神社。この神社がかつて中ヶ原の地名の由来になったと言われているの。」

「へえー。広いものだね。」

「お参りでもしよう。」

伊理は手を合わせてお辞儀をして、金を投げるとカランカランと鈴をならした。そして、再び手を合わせてお辞儀をする。伊理に指摘されたように指示を受けた。

「こうしてこうして・・・。」

伊理によく指摘されて結構時間はかかった。

（誰かが殺された・・・。この街で・・・。もう誰かが殺されるのは・・・。）

仲吉はそう思っていた。この事件が解決することを。

第1話 中ヶ原連続殺人事件（後書き）

はじめまして、エンブレムです。悲しみの風の詩を小説で書いています。

仲吉たちに待っているのは死か悲しみか平和か・・・！仲吉の戦いを最後まで見届けてください。

そして、中ヶ原連続殺人事件の真相は・・・。そして次々と死んでいく人たち。いったい誰が何の目的で殺人を続けているのか・・・。1ヶ月で殺す人数はまだ分からない。いつ誰がもしかしたら自分が命を狙われている可能性もある。この推理を解く為に仲吉はこれから立ち上がります。

第2話 連続殺人事件の被害者たち

中原神社では中ヶ原の地名の由来となっていた神社であった。どうやら何かを祀っていたようだ。

「なあ、沙良。この中原神社では何を祀っているんだ？」

「これはね。竜神と女神を祀っているの。その竜神様はここ中ヶ原に平和を齎したと言われているの。そして女神様は中ヶ原に光を齎したと言われているよ。」

中原神社では竜神と呼ばれる神と女神と呼ばれる神。かつて中ヶ原に平和と光を齎した2つの神があり、中ヶ原で大昔から祀られてきた。そのための神社がこの中原神社であった。

「なんかすごい神様だな・・・。」

「そうでしょ!?!? そうでしょ!?!? いいでしょ!?!?」

大はしやぎする伊理はとっさにピョンピョンとジャンプし始めた。

「あらら、楽しそうですね。沙良さんに伊理さん。」

後ろにいたのはなんか背は小さく、茶色のロングヘアで黄色の服を着ている。

「あつ。彩子ちゃん。」

「あなたがこの前に初寺高校に転校してきた徳川仲吉さんですか？沙良さんからよく聞いています。1年B組の水野彩子みずのさいこと申します。」

「ああ・・・。よろしく。」

彩子は神社の賽銭箱に近づくと右を向いた。そこにいたのは一人の男であった。

「輝雄さん。」

彩子と呼んだ輝雄と呼ばれた男は彩子の方を見て歩いた。

「彩子。こんにちは。」

「輝雄さん。こんにちは。」

彩子と伊理に輝雄と呼ばれる人は今度は俺のほうを見て近づいて

きた。

「何だ？こいつ？」

「君が沙良と伊理が言っていた転校生だね。僕は3年D組の竜野輝雄たつのお。よろしく。」

「こちらこそよろしく。」

輝雄は自己紹介を終えたとたんに神社のほうを振り向く。すると、長田がいた。

「おや、徳川君じゃないか。」

「長田先生！もしかして、先生もお参りですか？」

沙良は長田に駆け寄ってきた。先生も同時に沙良に駆け寄った。

「はい。」

「沙良、長田さんとは知り合いだったのか！？」

「うん。医者としての腕が結構いいの。よく病気になったら世話になってるよ。」

「先生はすごいよー！！多くの病人を救ったんだから！仲吉くんも病気になったら先生に見てもらいたいよー！！」

伊理は自慢するかのように叫んだ。

「腕なんて・・・僕にはまだまだだよ・・・人を救いたいという気持ちが強かっただけさ。」

「長田さん。仲吉くんは本当にあの中ヶ原連続殺人事件の犠牲者の一人にはならないと思いますか？」

輝雄からの口から長田に連続殺人事件の被害者が仲吉なのではないかと聞いてきたのである。

「輝雄さん・・・あのことを・・・。」

なんだか沙良たちは輝雄からあの殺人事件関連のことを言った瞬間に悲しそうな目をしていた。

「うーん・・・。基本的に誰が殺されるか分からないよ・・・。転校前に高校生が1人死んだし・・・。僕が知っているわけがないだろ？」

「もう話すしかないわね・・・。」

悲しそうな顔をした伊理たちは中ヶ原連続殺人事件のことを認めていた。

「かつてこの中ヶ原では1ヶ月に何人かが殺されます。1〜25人ぐらい。だから何人が殺されるかなんて分かりません。」

彩子は殺される人数とこれは多い場合もあれば少ない場合もある。そう考えていた。正に次々と人が死んでいく事件であった。

「仲吉。君は中ヶ原の事件をどう思う？」

「そうだな……。1人ずつ消されていく。俺は絶対に犯人を見つけ出してやる。」

「そうかい。」

そして、中原神社を後にした仲吉たちは長田と別れてあちこちを周ってきた。

その日の夕方。その帰り道で一人の男がいた。あれは浜無である。

「あれ？徳川君？こんなところで何をしてたんだい？」

「浜無先生こそ、こんなところで何をしているんですか？」

「ああ。あの連続殺人事件を調べていたのさ。」

またあの中ヶ原連続殺人事件の話であった。

「結構殺されている人はいてね。いったい今度は誰が消されるんだろうね……。」

「浜無先生！もしかして、竜神様、女神様とかの祟り……てやつですか!？」

「祟りねえ……。しかし竜神様や女神様はこの中ヶ原を平和にした神様。そう祟りを起こすほどじゃないと思うよ。」

「先生。僕もそう思います。」

伊理は祟りとかを考えていた。しかし、浜無や輝雄は祟りではなく他殺だと考えている。

「結構難しいところだな……。警察も必死に調査しているのに・

・。」

浜無は仲吉の家がある方向に向かって消えていった。

それからしばらく案内されて、仲吉は皆と別れて家に帰宅しようとしていたところだ。そして、1台の車が通り過ぎてその車が止まった。その人は車から降りると仲吉に近づいてきた。

「君が徳川仲吉さんでいいですか？」

「誰ですか？」

まったく知らない人であった。黒のスーツと黒のネクタイ。おそらく姿からして30代。そして、髪は黒くて短めの人であった。その人は何かを取り出して仲吉に見せた。

「俺は中ヶ原警察署の黒田角介くろだかくすけと申します。聞きたいことがあるので車でお話しませんか？家までお送りもします。」

「はい。」

仲吉は黒田と言う人の車に乗り込んだ。仲吉はさっきの何か。おそらく正に本物の警察手帳であった。この人は本物の警察である。

「警察が・・・何の用ですか？何か・・・俺は悪いことでもしましたか？」

「はっはっは！徳川さん、面白いこと言いますね！もしかして、警察が来たから逮捕されるとでも思いましたか？実は違いますよ。」

「ふう・・・。」

仲吉は警察が来たから何かで逮捕でもされるのではないかと思っていた。しかし違ったようで一安心のため息をついた。そして車を走らせた。

「実は聞きたいことがあるだけって言ったじゃないですか。さて、本題に入りますが・・・。初寺高等学校の2年A組の竜野正人たつのまさとについて教えてください。」

「竜野って・・・。」

「竜野と言うのはもしかして、竜野輝雄さんのほうをお考えですね。実は竜野正人は竜野さんの実の弟になります。」

「なんだと！？輝雄の弟が2年A組で事件の被害者・・・。」

これは初耳であった。竜野輝雄に弟がいて、その弟が2年A組に所属し、さらにはその事件の死者であったからだ。

「あなたもこの町で何を起こしているか知っているようですね。俺はこの事件を解決するために動いている刑事です。気になったこととかはありますか？」

「はい。竜野正人の机に俺が座ることになりました。その机には花瓶が置いてあってその花瓶のことを皆に言うシーンとしてしまいます。」

「それはそうでしょうね。あの出来事は私が聞きにいつでもあの出来事に関することは初寺高校では誰も話してくれないのです。」

初寺高校では輝雄の弟である正人のことについて先生たちも生徒たちも誰も話してくれないようだった。

「竜野正人さんの通夜は実は今日の夜に行われます。そして、明日に正人さんの葬式がスタートします。」

「え！？」

「しかし、正人さんの葬式は一般のご入場は不可なのです。この葬式はなぜか極秘です。」

流石は警察である。すごい情報網であった。これだけ事件について詳しく調べられている。

「だから、あなたが正人さんの葬式に言っても話を聞いてもらえずに追い返されるだけです。」

「輝雄にそんな秘密があったとは・・・。」

「そして、今日も一人お亡くなりになった方がいます。首が取れて死んでいます。この町に住む小説家の浜無康成さんです。」

「え！？浜無さんが！？」

さつき会ったばかりであった。いきなりだったのである。

「そして、ここがこの事件が発生した現場です。」

黒田はこの場で車を停止させた。周りは田んぼばかりである。そして無数のパトカーがあった。現場の検証中である。

「ついてきてください。」

仲吉は黒田に連れて行かれたところは浜無の首が取れてその場で倒れている場所だった。

「これは……。確かに首が取れています。間違いなく浜無さんです。黒田さん。」

「そうですか。浜無さんに最後に会ったのはいつですか？」

「夕方です。この町の案内を友達にしてもらっている時に偶然会いました。」

浜無は昨日は長田と一緒にいた。そして、今日は夕方に出会う。その後にこの場で死亡したのである。

「死亡推定時刻からすると、あなたと浜無さんが会ったのは4時です。そして、5時に徳川さんが帰宅途中に俺と出会っています。そのくらいを考えると4〜5時ぐらいでしょう。この時間帯はまだ明るいんです。」

「この中ヶ原連続殺人事件の事件であると言う証拠とかは無いですか？」

「実は中ヶ原連続殺人事件の被害者は死体に共通点があります。」

「共通点？」

中ヶ原連続殺人事件になんと死体に共通点があるというのだ。しかし、殺し方と殺した場所。倒れ方。それぞれ違うのに共通点があるわけがない。

「実は何かの白くて透き通っている粉を鑑識が発見しています。しかし、詳細はまったく分かりません。」

「毒ではないですか？」

この白い粉。白い粉と言えば毒を含む物もあれば小麦粉などの食べ物だったり塩酸だったりする。透き通っているため死体には白い粉は撒かれていないように見える。

「違います。鑑識で調べたところ、毒の成分はありませんでした。触れても平気です。この事件にはそれぞれ殺し方と言ってもたくさんあります。刃物やバットなどでそのまま撲殺。密室状態での毒ガス。高いところから落として殺す。放火で焼き殺すなどあります。」
全ての死体に謎の粉。そしてそれぞれに死に方、殺し方が違っている。

「黒田さん、中ヶ原連続殺人事件の最初に起こった事件はいつですか？」

「4年前の6月8日からです。この日に実は北崎伊理さんの兄で当時、初寺高等学校の生徒であった北崎直人さんきたざきなわとが初寺高等学校の2年A組の教室で何者かにバットで撲殺されました。そして北崎直人さんにはその白い粉が降りかかっていました。」

「え！？伊理の兄が中ヶ原連続殺人事件の最初の被害者！？それに殺された場所が初寺高校の俺のクラスの教室！？もうすでに中ヶ原殺人事件の現場にいたということですか！？」

伊理の兄の北崎直人がなんと中ヶ原連続殺人事件の最初の被害者であった。当時はバットで撲殺されて教室中が血塗れになったようだった。さらに死体には少量の白い粉が降りかかっていた。

仲吉が驚いていたのはそれだけではなかった。最近仲良くなった仲吉を入れて5人のうち2人もすでに被害者関係者であったからだ。

「驚いていますか？中ヶ原連続殺人事件にあなたのお友達が2人も被害者の関係者だったと言うことが……。」

「はい……。」

「本当は2人だけではありません。4人です。それだけではありません。初寺高校内には被害者関係者が多数います。」

「沙良や彩子も被害者の関係者！？」

なんと、伊理、暉雄だけではなく沙良や彩子。そして、他の初寺高校内で被害者の関係者が多数いるというのも驚きであった。

「4年前の6月10日に2人目の中ヶ原連続殺人事件によって水野彩子さんの自宅で水野さんの父親。そして、その3日後の水野さん

の父の葬式の会場で3人目の中ヶ原連続殺人事件により、水野さんの母親。それぞれが刃物に腹を刺されて死んでいます。」

「彩子の両親も被害者なんですか・・・！？彩子関係者というのも納得がいきます。」

彩子の両親もなんと被害者であった。明らかに3人がこの事件に近い。

「星見さんは3年前の1月1日。正月に中ヶ原連続殺人事件が起こり、実の母である星見綺羅ほしみきらさんが沙良さんの家が何者かに放火されたことによって焼き死んで亡くなっています。」

「沙良の母親が・・・中ヶ原連続殺人事件の3年前の最初の被害者・・・。」

これで4人全ての被害者との関係性が分かってきた。ここまで事件が悲しいだろうか……。だから花瓶のことを聞いても誰も答えなかった。

「そして、俺もかつての同期で仲良しだった刑事を中ヶ原連続殺人事件で失っていますし、初寺高校の2年A組担任の又中先生も実は信頼されていた3年前の校長先生があの事件で亡くなったのがよほどショックだったらしいです。」

「身近にいる人だけでこれだけ何ですか・・・。」

「はい。残念ながら真実です。事件のことは初寺高校の生徒や先生たち。中ヶ原の人にとって禁忌タブーです。なので俺が徳川さんと接触していたこと。事件のことはくれぐれも極秘に願います。」

「分かりました。」

「俺は急用が出来ましたのでここで失礼させていただきます。何か言いたいことがありましたら、こちらに連絡してください。では。」

黒田に電話番号が書かれたメモを受け取ると車に乗って去っていった。

初寺高校にこんな秘密があったのはとても驚きであった。この事件を初寺高校の先生や生徒はとても恐れているのだろう。

「・・・・・・・・。」

家に帰ってきた仲吉は中ヶ原連続殺人事件についてパソコンで調べ出していた。

『中ヶ原連続殺人事件。今度の被害者は小説家の浜無康成さん（31歳）。刃物によって首を斬られて死亡。死体発見時は首が取れた状態であった。死体には細かくて透き通っている白い粉がまかれていた。』

（いったい誰が犯人だ……。最初の被害者は伊理の兄北崎直人。4年前に何者かにバットで撲殺され死亡。死んだ後は結構立ち入りが禁止されていたらしい。次が彩子の父親。その次が彩子の母親。それぞれが刃物に腹を刺されて死亡。全ての死体には無色透明で無毒の白い粉が撒かれている。）

最初の被害者は伊理の兄北崎直人。2年A組の教室にてバットで撲殺され死亡。

（明日、2年A組を調べてみるか。）

明日の朝。ご飯を食べた仲吉はさっそく学校へ向かう。

「あっ！仲吉くん！」

家の前で待っていたのは沙良であった。沙良の母親。星見綺羅は沙良の家を放火して焼き殺され死亡した。沙良も事件の被害者である。

「浜無さん、殺されちゃったんだって。」

「そうか。そうか。」

仲吉はあえて知らないふりをした。輝雄がこの事件を引っ越して

きたばかりの俺の前で堂々と言った。だが、あの事件。2年A組の教室で伊理の兄の北崎直人が何者かに殺された事件が起きた。そして竜野正人が6月8日に殺された事件。極秘の葬式。これは皆は俺に維持でも教えないつもりだろう。

「残念だったなー。」

「そうね。はは・・・。」

沙良は苦笑いをした。

学校に入った仲吉と沙良は教室に入って最初の中ヶ原連続殺人事件が起きたあの教室で授業を受ける。

（何か、中ヶ原連続殺人事件現場で授業を受けるって何か悲しい雰囲気だ・・・。それに俺が使っている机はこの前の連続殺人事件で死んだ竜野正人の机だからな・・・。）

被害者がここで殺されていてしかも被害者が使っていた机を自分が使っている。そのうえ、被害者の悲しみなのか漂っている雰囲気を感じる。

「では、今日はここまで！室長！」

「起立！礼！」

「ありがとうございます！」

ようやく授業が終わった。昼ご飯の給食の時間になっていた。

（給食かよ・・・。いつも不味いものばかり来るからよ・・・。俺の口には合わないって・・・。）

不味い給食が来ると感じ取っていた仲吉に伊理が仲吉に話しかけてきた。

「仲吉くん！何々？も・し・か・し・て・・・。給食が嫌い？大丈夫よ！いつもここではこれを食べてっていったら承諾してくれる人たくさんいるから！！ね！」

「そうそう。私の嫌いなものはいつも皆が食べてくれるから。」

「そ．．．そうか．．．やけに親切な人がたくさんいるんだな．．．」

普通の学校の給食ではこれを食べてっていったら食べてくれないもののにここでは代わりに食べてくれると言う人がたくさんいるらしい。

「俺は不味くても残さずにしっかりと食べるんだよ。お前らとは違って．．．!!」

「よけいなお世話よ!!」

伊理は大声で怒鳴った。こいつはかなりの負けず嫌いのようだ．．．

放課後。皆が帰る時である。

「仲吉くん!一緒に帰ろう!」

「ごめん、俺は又中先生に用事があるから。」

「そう。じゃあね。帰ろう。伊理ちゃん。」

「そうね!沙良。」

沙良と伊理は仲吉を放って教室から出て行った。1人になった仲吉はさっそく何か手がかりになりそうなものを探し出そうとする。

「なんにもないな．．．。」

今度は教卓の引き出しを調べた。中にはプリントや文房具がたくさんある。

「これは．．．。」

”希望新聞”と書かれたプリントを見つけた。このプリントはよくこの初寺高校で渡されているプリントである。日付は6月8日だった。

『竜野正人くんが中ヶ原連続殺人事件にて今日にて死亡。次々と死亡者が多発。くれぐれも注意しましょう。』

(．．．．．やはり．．．．書かれてあった。)

『北崎直人くんが2年A組の教室でバットで撲殺され死亡。3年間旧校舎にて授業を行います。6月8日は命日の日です。』

6月8日とは俺が引越してくる日。その日に命日があり、その昨日は竜野正人が殺された日であった。

第3話 悲劇

希望新聞には北崎直人が2年A組の教室で殺害されたこと。そして、6月8日。北崎直人が殺されて中ヶ原連続殺人事件が初めて発生した日。この日には初寺高校で毎年、北崎直人の命日が行われている。そして、悲しみと絆の祭典が毎年の6月8日に行われている。そのことが書かれていた。

「君もあの事件を調べるのに苦労しているんだね。」

「!？」

仲吉は思い切って振り返ると長田がいた。

「6月8日は伊理さんの兄の直人くんがここで殺された日と言うのは知っているよね。そして、この初寺高校には残念なことに多くの中ヶ原連続殺人事件の被害者を出しているんだ……。結構、警備は強化しているんだけどね……。」

「で、やけに警備が鋭いなおもったわりにここに来ていますね。」

「何、この校長先生に許可をしっかりと取ってきた。又中先生にもちゃんと書いておいているよ……。又中先生は僕が仲吉くんに用事があるってことにしてくれたよ。校長先生にしか事件のことは言っていないけどね……。」

「そうですか。」

中ヶ原連続殺人事件は数多くの被害者を出していて、とくに初寺高校の被害者は生徒、そして教師と非常に多い。

「そして、初寺高校の敷地内には慰霊碑があつてそこには死んでしまった人たちの名前が次々と書かれているのさ。もちろん浜無さんの名前もね。」

「いった誰がこんなことを……!許さねえ……!」

「確かにそれは僕にも同意するよ……。知らない人たちであつて

も中ヶ原の仲間だから……。犯人を絶対に許せないよ……。」「
だが、まだ手掛かりや証拠は不十分であった。

「そして、確か今年の6月7日。悲しみと絆の祭典の昨日に竜野正
人が何者かに殺されたという事件がったよ。そして、今日の昼間に
極秘で竜野正人の葬式が行われた。もちろん、今日は輝雄くんは休
みだよ。」

輝雄の弟の正人が殺されて3日。今日、6月11日に葬式は行わ
れていた。

「次は誰が殺されますか……。？」

「分からないな……。共通点が透明で普通の目では醜い白い粉が
撒かれているそれしか……。そして、最初の事件の被害者。伊理
さんの兄の直人くん。彼は詩っての通り、4年前の6月8日にこの
教室で死んでいるよ。事件発生時は別の場所で授業をやっていたよ。」

「それで今の教頭先生。おおはらきいち大原貴一先生は当時の2年A組の担任をし
ていたんだよ。今年になって教頭先生が離任して新しく大原先生が
教頭になったんだよ。」

。高校の教頭。大原貴一が当時の北崎直人の担任であったことに・

「でも、結構留守にしているからいる時に話聞いてみたら？大原先
生が当時に今の先生たちの中ではすごく詳しいからさ。それに私の
名をつかってくれれば事件のことを話してくれるよ。」

普通ではあまり中ヶ原連続殺人事件のことを初寺高校の教諭・生
徒同様誰も話してくれない。しかし、この学校の教頭である大原が
当時の2年A組の担任であったため長田の名前を使えば簡単に話し
てくれる人だという。

「大原先生は私の病院によく来る人さ。結構、事件のことがトラウ
マにでもならなければいいけどね……。直人くんの教師をやっ
ていたというのは事実だし、僕の言ったことも全て事実。それとこれ
を又中先生に渡しておいてくれ。じゃあ。」

長田は2年A組の教室から廊下へと歩いていった。

「俺もそろそろ帰るか。又中先生にアリバイでも作るか。又中先生に用事があるってことにしているから。」

そう言って仲吉は2年A組の教室を後にして廊下を歩いて職員室に向かった。

職員室に向かった仲吉は又中に会う。

「何だい？徳川くん。私に何か用事かい？さっき、君は教室で長田先生と何か話していたが・・・。」

「実は長田先生が又中先生にこれをとて・・・。」

仲吉はさっき長田からもらった書類を又中に差し出す。又中はしっかりとそれを受け取る。

又中の表情を観察してみると又中は深刻な顔をした。

「確かに受け取ったよ。じゃあ、徳川くん。しっかりと帰るんだよ。」

「はい。」

仲吉は又中に見送られて帰ることにした。

又中の表情から長田の書類には何かが書かれていた。だが、これは何かの検査の時の結果のような書類だということを仲吉は考えた。

仲吉が帰る日はもう夕焼けであった。2年A組の教室を調べていたからだったからだ。

「あら？あなたが長田先生が言っていた徳川仲吉くん？」

仲吉が表をあげて2人の女性をよく見た。1人は緑の髪に水色の服を着ていて。もう1人は茶色の髪に白いシャツを着ている。

「誰！？」

緑の髪の女性は仲吉をよく見て喋り始める。

「私は長田先生の病院に務めている看護婦の菊地美紀。」

菊地が名乗った後に茶色の髪の女性も自己紹介を始める。

「そして私は初寺高校2年A組の副担任の萩野谷静香。よろしくね。」

実は仲吉は2年A組の副担任に会ったことがなかったのだ。最初の登校日も10日も・・・。

「副担任の私には徳川くんには会ってなかったわ・・・。又中先生から転校生が来ているという話は聞いていたけど・・・。この頃は風邪で休んでいたから・・・。」

「それで・・・何か用ですか？」

「今年の6月8日。北崎直人くんの命日。悲しみと絆の祭典がここ初寺高校で行われているのよ。その昨日の6月7日に竜野正人くんが中ヶ原連続殺人事件によって殺された日。」

「・・・・・・・・・・。」

菊地が今年の6月7日の輝雄の弟である正人について話し始めると、便乗して萩野谷も説明を始める。

「この日の悲しみと絆の祭典が行われて多くの中ヶ原の人たちが初寺高校に来るわ。それを利用されたかも知れないの。正人くんは悲しみと絆の祭典が終わって家に帰る途中で首がなくなっている状態の正人くんの死体があったの。犯人が正人くんの首を持っているかも知れないわ・・・。」

正人は今年の6月7日に犯人に首が取れて首が持っていかれて死亡した。

浜無が殺害された時は首はしっかりと現場にあった。だが、正人の場合は首が何者かによっていかれたらしいのだった。

「これは結構残酷な事件ね・・・。考えただけで・・・。大丈夫？」

「大丈夫です。菊地さん。では俺はこれで。」

仲吉は2人に別れを告げてその場を走っていった。

仲吉がはつきりしたことは謎の白くて醜い透明な粉は正人のときにも降りかかっていたのではないかとおもっていたことであった。中ヶ原連続殺人事件の共通点が謎の白くて醜い透明な粉が死体に降

りかかっていることである。

それだけではない。沙良、伊理、輝雄、彩子の4人全てが中ヶ原連続殺人事件の被害者の関係者である。いや、4人以外にも初寺高校では中ヶ原連続殺人事件による殺人が行われて多くの職員や生徒、保護者、一般人。次々と死んでいく。

家に帰ってきた仲吉はしばらく中ヶ原連続殺人事件のことを考えていた。その間に時間はかなり経過している。

両親はまだ仕事で家にはいなかった。

すると突如、電話の音楽が流れてきた。これを聞いた仲吉はさっそく電話に出る。

「もしもし。」

『中ヶ原署の黒田です。徳川仲吉さんですね。』

「はい。」

「竜野正人さんは首がなくなった状態で死んでいます。」

最初に黒田が話してきたのは輝雄の弟である正人についてであった。

「はい。俺の副担任の萩野谷先生からそのことを聞きました。」

萩野谷に最初に会ったのは夕方頃。そして、菊地もいた。

初寺高校の職員や教師、生徒たちは事件に関する話は黙っているはずなのに萩野谷は竜野正人について話した。

さらに竜野正人について菊地や萩野谷から聞いたことを黒田に話す。

「そうですか。話が変わりますが伝えたいことがあります。」

「なんですか？」

「星見さんは3年前の1月に母親を失いしばらくして母親を失ったショックで多くの人を机や椅子、素手で殴り、重傷にした事件が発生したということが分かりました。」

「え！？沙良が・・・！？嘘ですよ？沙良がこんなことをするなんて・・・。」

沙良が事件で母親を失ったのがショックで学校でとんでもない事件を起こしていたというのはものすごく初耳であった。

事件のショックや何か失ってあまりにも沙良は悲しんでいると考えている。

「残念ながらこれも本当です。だからと言ってこの人は信じないと言うのはよくありません。」

「分かっています・・・。」

「星見さんは多くの同級生、教師を机や椅子、素手などで殴り、多くの同級生が病院に搬送されました。事件発生時は人を無差別に殴り、そして教室中や廊下がすごく散らかっています。」

「それで沙良はどうなりましたか？」

「苦しみだして、その後に病院に搬送されました。相当、精神が不安定の状態でした。何とか2年間。中学卒業までに直りました。」

母親を失ったショックで当時の沙良は精神が不安定になり多くの人が沙良によって重傷を負わせてしまった。

沙良にもこれほどの悲劇があったのは仲吉も驚きであった。

「悲劇があるのは星見さんだけではありません。竜野さん、北崎さん、水野さんにだって悲劇があります。中ヶ原連続殺人という悲劇が・・・。」

「・・・・・・・・はい。」

多くの悲劇が起きる。それはとても恐ろしい自体にあった。

少しの出来事がきっかけで悲劇がすぐに出来、誰かが殺される。

さらに殺された事で誰かが悲しみのあまりに殺される。そういうことだあってありえるということだ。

「実は白くて透明な粉を偽って死体に振り掛けて、中ヶ原連続殺人事件を偽っている事件が多いです。事件で殺された人の遺族が悲しみのあまり、犯人ではないかと思う人を殺す事件だって発生します。」

「事件が中ヶ原連続殺人事件だという確実な証拠はありますか？」

「白くて透明な粉があり、それは目ではすぐ近づけないと見えません。普通の粉なら白い粉とか小麦粉とかそういうものが基本ですが、白くて透明な粉というものはあまり聞いたことはありません。しかも、何も反応もない粉です。」

毒もない。人に害がある物質も粉には含まれていない。その上、すぐく目を近づけないと見えない粉。

「そのため、偽っている事件がありますが、どの事件も偽っているのに失敗しているということになります。だから確実な情報と言えるのです。大量にまいてもすぐく目を近づけても見えませんか……。」

白くて透明な粉。普通なら考えられない粉。

犯人は何のために人を殺した後にこの人には何の反応もない粉を撒いたのか……。

何のために連続殺人を行っているのか……。

犯人は誰なのか……。

「ではこれで失礼します。」

「ありがとうございます。」

黒田との電話を終えると受話器を置いた。

仲吉は今までの出来事を頭の中で整理を始めた。

（4年前の6月8日。伊理の兄の北崎直人は2年A組の教室でバットで撲殺され死亡。）

（その2日後の6月10日に彩子の父が刃物を刺されて死亡。さらに3日後の6月13日に彩子の母が死亡。）

（3年前の1月1日。沙良の母の星見綺羅が放火により死亡。数日後に沙良は母を失ったことで悲しみのあまり、人を無差別に殴る事

件が発生。」

（そして、今年の6月7日。俺が中ヶ原に引っ越す日に3年前の6月8日から行われていた悲しみと絆の祭典の昨日に輝雄の弟である竜野正人が首がなくなった状態で死亡。そして、3日後の6月10日に浜無康成さんが死亡。）

今はっきりしている事件はこれぐらいであり、それ以外にも中ヶ原連続殺人事件により、多くの事件が発生している。

（まだ情報不足か……。くそ……。）

6月12日。仲吉は朝になって起床する。

「ふああ……。もう、朝か……。」

現在の時刻は午前6時半と結構こう見えても仲吉は早起きである。仲吉は朝ごはんの鮭とワカメの味噌汁を食べている。

「おう。仲吉。中ヶ原に来て4日。その間にいい出来事は起きたか？」

仲吉はもう中ヶ原に来て4日経っている。

数々の悲しみ。そう、中ヶ原連続殺人事件であった。この事件がある限り、中ヶ原の人たちはいつ殺されてもおかしくない状況である。

引っ越してきた仲吉たちはこの事件の存在はあまり知らない。この事件はテレビやネットではあまり乗っていない。結構、極秘の情報があるということだった。

「ああ。起きた起きた。」

仲吉は一定の質問を適当に答えて聞き流した。事件のことは黒田に他言しないように言われている。当然、家族にも事件のことは言

っていない。

「そうか。そうそう、出張で父さんも母さんも中ヶ原を出ることになったぞ。」

「ええ。だから留守番よろしくね。」

「はいはい……。」

一定と満子は仕事で忙しくて仲吉によく留守番を頼んでいる。そのため、家には仲吉1人が多い。

仲吉は着替えて玄関を出る。

「あつ。仲吉くん。」

「さ……沙良か……。」

家の前に沙良が待っていた。

昨日、黒田から沙良が事件で母親を失った多くの人が重傷になったという悲惨な事件が発生している。

だが、黒田から仲間を信じるようにと言われている。仲吉はその期待に答えようとしていた。

「行こう。仲吉くん。」

「ああ。」

仲吉は沙良と共に学校へと向かった。

しかし、嫌な予感がしてたまらなかった。

「殺す殺す殺す殺す……。」

「どうしたんだよ……。沙良……。」

沙良は殺す殺す殺すと連続でブツブツ言い始めた。

「へ!? な……。なんでもないよ。」

「そ……。そうか……。」

いったい何だったのだろうか。沙良が殺すと連続して言い始めるなんて……。

「仲吉くん! 沙良! おはよう!」

向こうから聞こえた大きな声。間違いなく伊理であった。

「おはよう。伊理ちゃん。」

「おはよう。」

伊理は自分の兄が最初の事件の被害者である人だ。この事件のことは黒田から他言しないようにしている。

最初に中ヶ原に引越してきて初寺高校に転校した初日を考えていた。あの事件に関する出来事はできるだけ沙良や伊理を含めて多くの人があの事件を隠しているように・・・。

午前の授業が終わり、仲吉たちは屋上にいた。

「来たよー。仲吉くん。」

「仲吉さん。私もここで食べます。」

その声は輝雄だった。彩子も一緒に来ている。

仲吉以外の4人は全て事件被害者の関係者である。殺されて実際につらいのはこの4人だろう・・・。

「仲吉さん、美味しそうな弁当ですね。」

「そ・・・そうか・・・？お前らも美味しそうだけだな・・・。」

仲吉の弁当には母である満子の手作りのハンバーグとミートソースのスパゲティ、トマトサラダと白いご飯が入れていた。冷凍食品の面影はまったく感じられない。

沙良たちの弁当も仲吉の弁当に負けじと豪華な弁当であった。

「あら？徳川くんたち、ここにいたのね。」

「萩野谷先生！」

昨日、夕方に菊地と共にいた仲吉たち2年A組のクラスの副担任である萩野谷だった。

「昨日、あったばかりね。ここで昼食？」

「萩野谷先生、どうして屋上に来ているんだ？」

「萩野谷先生はよく屋上に来ているの。」

沙良がいうには萩野谷はよく屋上に来ているようだった。

「星見さんのいうとおり、私はここによく来ているわよ。徳川くんはこういうの始めてらしいけど。」

萩野谷は柵に腕を乗せると空を見上げた。日光を見上げて、手を伸ばす。

彩子は萩野谷に近づくと萩野谷と同じように柵に腕を乗せた。

「萩野谷先生は病気になるすぎです。大丈夫ですか？」

「ええ。これから気をつけないと・・・。」

「そういえば、萩野谷先生は仲吉くんがきた頃にも病気で休んでいましたね！」

6月9日に仲吉は萩野谷の姿を見かけなかった。どうやらこの日は病気で休んでいたらしい。

輝雄は弁当を食べて飲み込んでから仲吉に近づいた。

「萩野谷先生は体が弱くてよく風邪になりやすい体質だよ。6月9日は夏風邪で休んでいたから。」

萩野谷は確かに体が弱くて風邪になりやすい。そのため休むことが多くなっているらしい。

「大丈夫よ。水野さん。私はもう夏風邪は直りましたから。」

「よかったです。」

「じゃあ、私はこれで失礼させてもらうわね。」

「分かりました。」

萩野谷はそう言い残すとその場を歩いて屋上を後にしていった。

放課後になると皆は家に帰ったり部活をしたりする。

初寺高校はなぜか、部活をする人より帰宅部がかなり多い学校であった。そのため、それぞれの部活の人数は少ない。

「さて、帰るか……。あれ？沙良と伊理は……。何処だ……。？」
いつの間にか沙良と伊理はいなかった。仲吉は学校中を探し始めた。

いったい何処へいったんだ……。？

「今度は屋上の方へ行ってみるか……。？」

仲吉は階段を次々と上がって屋上まで上った。

「やっと、ついた……。つつ——！？」

仲吉は見てしまった。

あれは明らかに誰かによって殺された血塗れの死体だった。

「なんだよ……。これ……。！？」

仲吉は死体があるほうへ駆けつけた。後姿は顔が見えなくて誰だかわからない。

「しっかりしろ！？って伊理！？おい、伊理！しっかりしろ！」

何度も伊理を呼びかけたが残念ながら何かによって頭が割られていて死んでいた。

「いったい誰が……。これは……。？」

「早く警察に連絡を……。？」

仲吉はポケットから携帯を取り出すと110番をかけて連絡する。

「もしもし、初寺高校の屋上で伊理が何者かによって殺害されました。」

そう言い残してしばらく電話した後に警察が来るまで現場をそのままにする。

しかし、伊理が殺されているというのは驚きであった。嫌な予感
はあきらかにしていた。まさにそのことであった。

「と言うことは……。沙良も……。！？」

沙良の姿が放課後にはもう見えなかった。沙良がいらないと言うことは……。

沙良が何者かによって殺されている可能性があるということであった。

すぐに仲吉は警察が来るまでの間に沙良を探す。

「いったい何処にいるんだ……。沙良……。」

廊下、教室。何処に言っても見当たらない。

2年A組の教室に来た仲吉はすぐに教室の扉を開けて中に入る。

「これは……。」

仲吉が目にしたのは萩野谷の死体であった。萩野谷も頭を割られて大量の血が流れている。

「萩野谷先生！？萩野谷先生も殺されて……。」

ここはかつて伊理の兄である直人が最初の被害者となり殺された事件現場でもあった教室である。また再びこの教室は殺人現場と化していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9010p/>

悲しみの風の詩

2011年1月20日19時55分発行